

南方（ニューギニア）

私の戦争体験

島根県 上田健二

一 初年兵時代

昭和十六年五月勤務地（旧満州国撫順市）での徴兵検査で甲種合格の言い渡しがあり、同年十二月十日朝鮮第四十三部隊に入隊した（北朝鮮咸興市）。

丁度、厳寒の季節で、連日の訓練場は、砂丘地であり、樹木も少なく、砂塵の吹く荒天の日が多く、厳しい教育訓練に加え、天候との戦いでもあった。でも若さと情熱でこれに体当たりで取り組み困難を克服した。特に教育期間の後半には大陸戦闘を念頭にした訓

練（トーチカ攻撃や対戦車攻撃等）が主となり、的確にして迅速果敢な動作が要求され、少しの誤りや緩慢な動作にはきつい叱責が落下する等苛酷な教育訓練が続いた。このため体は綿のように疲れたが、それは精神力で補い体力の保持に努めた。だが休憩時間には寒さに震えながら、一本の煙草も分けて喫むなど楽しい憩いのひと時もあった。

演習を終え、ひとたび内務班に帰ると、精神教育と称し、古参兵の初年兵いじめにあった。些細な過失、失敗（①銃の手入れ不充分、②班内の掃除不良、③動作の緩慢等）でも初年兵の連帯責任として全員が罰を受け（対向ビンタ、長時間の腕立て伏せ等）精神的肉体的な苦痛を味わった。

昭和十七年四月一日、幹部候補生採用試験の結果「乙

種」に採用され、同年五月一日福知山教育隊へ派遣された。第二十師団管下の羅南連隊の候補生も、同時に入隊し、同一中隊の配属になり、半年間起居を共にし、厳しく辛い教育訓練に耐え無事に教育期間を終了した。同年十一月三十日原隊に帰隊した。

ところがここで同年兵との再会を喜ぶのも束の間、待っていたのは転属命令で、それは風雲急を告げる南方戦線であった。苦楽を共にした同年兵と別れを惜しみ、転属先の竜山部隊へ出発した。

二 ニューギニア戦線へ出陣

イ 竜山出発

竜山の野戦部隊（南海派遣軍猛朝第二〇五三部隊）作業中隊に配属になった。平素は静かで整然とした雰囲気の内務班も、出陣を前にしてか、騒々しく、雑然としており、兵隊の眼も何となく光り輝き、改めて戦場への出陣を強く意識した。第一小隊（隊長・徳永少尉）第二分隊長を命ぜられた。

作業中隊は、初めての経験で、任務の内容も分からず、演習に参加したり、上官の指導を真剣に聞き、一

生懸命に勉強に努め、また班内では、新しく配属になった召集兵の軍装品の整備充足に、あるいは部下の身上調査を実施する等極めて多忙で、あわただしく一日は過ぎた。夜間消灯後にはじめて、我が身に立ち戻り、戦場では一番やるぞとの決意と、ここまできた以上、生死は問題にしないあきらめの心境とが交錯し、苦悩する夜もあった。

明けて昭和十八年正月三日、お屠蘇もそこそこに、粉雪降る厳寒の営庭において、松本部隊長指揮のもと完全軍装に身を固めた。

精鋭四千余名は、軍旗を中央に整然と整列し、厳肅に力強く出陣式が挙行された。連隊全員の集結は圧巻であり、素晴らしく頼もしい限りで、戦いを前に米軍何者ぞと士気大いに燃え上がった。

翌一月四日早朝、前日からの雪がますます激しく降り続く中を、軍靴の音も高らかに営門を出発し、竜山駅に待機していた軍用列車に乗り釜山港へ向かった。

ロ パラオ島に上陸

釜山港で貨物船に乗り、集結場所の大分港沖で船団

の集結を待ち、三十隻の大船団は護衛艦を先頭に威風堂々南方を目指し出航した。九州の最南端大隅半島沖を過ぎ噴煙上がる桜島を右舷に望見した時は、これで生きて、二度と本土を踏むことは望めないと感慨無量であり、島影が水平線の彼方に没するまで見つづけ、最後の別れを惜しんだ。

乗船した貨物船は一万トン級の大型船であり、内部は三層の船倉に分かれ、さらに各層は二段に仕切られて、まるで蚕の棚同然であった。中隊は最下層の船倉で、寝ると枕元で波の音が聞こえ、万一敵潜の攻撃に遭えば、甲板に登る時間的余裕も無く、一撃で海の藻屑と消えるのは当然の状況であり、悪寒を覚え恐怖心かられた。

船が南に航行するにつれ気温も上昇し、着ていた冬服を脱ぎ夏衣に替えた。出航してから三日目になり、中隊長から戦況不利の「ガ島」救援の作戦命令を初めて明かされた。ところが比島沖を過ぎた頃、パラオ島に上陸し一時待機との作戦命令が出た（ガ島の全面撤退による）。

船団は進路を変更してパラオ島に向い、同島沖まで航行した処で、敵潜の攻撃の恐れありとの情報で入港を中止し仮泊した。友軍機や護衛艦により敵潜水艦を攻撃する間待機し、安全を確認した後パラオ港に上陸した（同島周辺の珊瑚礁の陰に米軍潜水艦数隻が潜む）。我軍の補給基地の足元まで侵入し、潜む米軍の恐るべき大胆な作戦に舌を巻く反面、友軍の健在を眼の当りにして、心強く思いますます必勝の信念に燃えた。

ハ ハンサ湾に上陸

東部ニューギニア戦線へ出撃の命令が下り、連隊（第七十八連隊）の先遣隊になり、他連隊と共に七隻の船団で、同港を出航し、約一週間後に船は赤道上を通過した。海は全くの無風状態で暑さは到底筆舌で表せない程の猛暑で、船倉での居住には耐えられず甲板での休憩が許された。幸いにも敵機・敵艦の攻撃も無く、まるで平時の観光旅行の気分でもあった。

赤道をなお南へ約一週間航海を続け、目的地のハンサ湾に入港した（昭和十八年三月九日早朝）。上陸命

令を待つ間甲板に出て初めて見る湾内の風景を珍しく眺めた。湾内は波静かな遠浅の砂地の海で、船は相当沖に投錨しており、陸上の兵隊の姿も小さく見えた。また南方の太陽は強烈に照りつけ、波頭は銀色に輝いており陸には椰子林が延々と続き、ここが戦場かと一瞬忘れる程の湾内であった。

ところがフルスピードでランチが船に近づき、乗っていた軍参謀の突然「空襲々々。大至急上陸せよ」の大声に景色観賞の夢路も一瞬に醒め、現実の戦場に投げ出され、急遽艇に乗り上陸、椰子林の中で露營した。

これまで船団の入港の都度敵機の空襲があり、折角遠方より苦勞して輸送した貴重な軍用物資も消失し損害が甚大であった。

当時すでに我が空軍には迎撃する余力を持たず制空権は全く米軍の手に握られ、敵機の跳梁するままであった。

二 道路建設作業

ラエ地区の戦況不利を打開するため突貫工事の道路建設が策定されていた。これまでの船団輸送はすべて

敵機、敵魚雷艇の跳梁で大損害を被り失敗に終わり、もう二度と海上輸送は不可能になった。

だがラエ地区への増援はますます急を要する状況となり、これを打開するため、緊急にマダンからラエまでの間に新道を建設し、補給線の確保が急務になった。

この作戦にもとづき、翌日の夜間には、船舶工兵隊の大発艇に便乗し同港を出航した。昼間は敵機や敵魚雷艇の攻撃を避けて椰子林の中で仮眠し、夜間だけの航行を続け、四日目にアレキスハーヘンに着き下艇した。

これから先は大発殺しの異名を取る敵魚雷艇の跳梁海域で、至極危険のため、やむを得ず陸路の行軍になった。陸路も昼間は海上同様に敵の空襲が激しく、夜行軍のみを続け先を急いだ。睡眠不足による疲労が重なり、マラリアの発病や飲料水の不適當による下痢、それに対処する医薬品の不足等で発病者も多くなり落後者が続出した。

昼間の仮眠は、椰子林で吊った蚊帳（分隊で一張の携行）の中に分隊全員（十四名）が、四方から頭部だ

け入れ胸部より下は蚊帳の外に出して一応蚊の襲撃に備えたが、何分、獐猛なマラリア蚊であり、群れをなして襲い、蚊帳の外に出た体を服や巻き脚絆を問題にせず刺したので、マラリア患者が上陸早々から激増し、我々の着想も蚊には通用しなく頭を悩ました。

この椰子林は、最初に入植したドイツ人が教会を開き、土着民を宣撫し植林したもので、乾燥コブラ（椰子の実の中の甘皮で油分を含んでいる）の採取を目的にしており、集荷のうえドイツ本国に輸送していた。

また椰子林の規模は奥行き約百メートル延長約百キロで、中央に幅員四メートルの自動車道を設けており、椰子の木は蒼盤の目の如く整然と植えられて立派なものであった。

同島第一の集落マダン（第十八軍司令部の所在地で高床の家屋が百戸程度並んでいた）を経て新しく道路建設が計画されているボガジン溪谷の作業現場へ前進し、割り当て工区で作業に従事した。

この作戦に投入された兵力は第七十八、第七十九の両連隊の強兵で、銃を置き鶴嘴を持ち、もっこを担ぎ

炎天下裸一貫になって全身汗を流しつつ土を掘り整地し、作業に没頭した。作業期間中も連日敵の戦爆連合機（戦闘機双胴のロッキード、爆撃機B17等で百機程度）が我が軍の頭上を旋回し、友軍機の迎撃や対空火砲の皆無を嘲笑するかのようには搭載した爆弾（主として十五キロ、時には百〜二百キロ）を自由自在に宣伝ビラを撒くが如く投下し、それを終えようと機内から半身を乗り出し飛行服に飛行メガネ、白のマフラーを風に靡かせた飛行士が機銃を乱射し、その傲慢な姿を樹木の陰等から見た我々は、制空権の無い戦争が如何に無惨で無能力なものか、切齒扼腕したものでした。

作業期間中の食糧の配給は後方基地の空襲で軍用物資を焼失し、定量の四分の一以下に減量されており、これを補うため、各分隊共に食事当番と称し二名を残して、タロ芋や野生の草類の採取に当らせた。未開の土地であり初めのうちは図鑑も無く、また食糧としての可否を識別する能力を持たない兵隊のこと、採取したものが毒芋、毒草とは知らず食事に供した失敗談もあり、悲しい犠牲者も出た。私も被害者の一人で味噌

汁の具に芋が入っており、毒芋とは分からず口の中に入れたとたん電撃的衝撃が口中を走り、反射的に危険を感じ即座に吐き捨てた。これが幸いして一命を拾う結果になったが、口中は痺れ、感覚を失い、牛の涎の如き唾液が間断無く流れでて一週間ぐらい止まらず難渋した。他分隊でも同様なことがあって、不幸にも毒芋を飲み込み三十分間程度もがき苦しみ死亡した兵隊がいた。このことから兵隊間では電気芋と称して最も恐れた。

ホ 濠軍と戦う

(昭和十八年九月一日―五日の間)

「第七十八連隊はナサブ平原(ラエの背面)に降下した濠軍を迎撃し、ラエ地区の友軍を援護せよ」との命令にもとずき、即刻作業を放棄し戦闘任務につくため前進を開始した。

中隊は連隊主力の前方(約五キロ)の地点に進出し、陣地を構築し濠軍の侵入に備えた。第一小隊は中隊主力の前方の高台に出て防備を固めて敵の攻撃に備えていたところ、早くも翌朝には正面密林より自動小銃で

武装した(自動小銃は二十五連発銃)敵軍約三十名が突然現れ、銃を乱射し攻撃して来た。その弾丸の量は雨霰の如く、我が軍の頭上に飛来して、機先を制された我軍はとても壕から身を乗り出し正確な射撃を行うことが不可能な状況となり、ただ無闇に敵兵に向い盲撃ちで応射し、辛うじて撃退することができた。

この戦闘で勇敢にも壕の中から出て応戦した兵隊がいたが、敵の弾幕には抗し難く三名の負傷者が出た。このため、その後の戦闘に貴重な教訓となった。

この陣地も防禦に不適當との判断で三日後の夜半、密かに後退(約二キロ)し、再度陣地を構築し敵に備えた。

中隊の配備状況は中隊主力を川の右岸台地に集結し、第一小隊は左岸台地に陣地を構築した。私は小隊左翼を警戒防備するため、分哨長となり、部下五名と共に分哨の任についた(左三百メートルの地点)。命令内容は「陣地の死守ではなく戦況を見て不利と判断したら速かに小隊の位置に戻り合流せよ」であった。

陣地を決定し各自のタコ壺掘りを実施し、それがい

まだ完了しないうちに、敵の威力偵察隊（約二十名ぐらい）の姿が対岸の密林（約百メートル離れていた）に散見できた。あまりにも我々の面前で大胆不敵な行動を展開したので、意気盛んな我が軍は発砲し、敵を密林の奥へと一応撃退した。しかしこれが彼等の作戦だったようで、発砲したことで分哨の位置を教えたことになり、後刻大きな痛手を被ることになった。

翌朝早く、雨に濡れた銃の手入れを実施中（正面に對しては警戒を厳にしていたが、背後は密林も深く一応安心して無警戒にしていた）、背後の山手から突如敵が来襲し（昨日の小部隊）、自動小銃を乱射して攻撃してきた。不意を突かれたが慌てず部下と協力し、猛然と反撃して一度は撃退した。しかし我が軍の兵力過小を知った敵は再度攻撃に出たので、戦況不利と判断し、戦死した部下の遺体収容の不可能を詫びつつ、小隊の位置に残った部下と共に戻り合流した。

この交戦で尊い有能な部下二名（水田、大熊の両一等兵で、共に大阪出身）を失ったので、敵を小隊の位置で撃退した後、いまだ敵の脅威の去らない分哨陣地

に戻り（部下二名と共に）、戦死した部下の遺体を確認し、短時間のうちに爪、髪を切り取り部下に持たせ、亡骸には土を盛り、丁寧に埋葬し最期の別れを惜しみ、小隊の位置に帰った。

分哨を撃破した敵は、小隊陣地の背後から再度攻撃に出たので、今度は襲撃を予期し警戒を怠らず応戦体制を整え、部下の甲い合戦、飛んで火に入る夏の虫と、猛然と反撃し撃退した。この戦闘で敵兵一名を射殺し、軍命令である敵兵の死体収容は可能であったが、敵軍の撤退と同時に我が軍陣地に向い無数の煙弾が飛来してそれも叶わず、我が軍陣地は煙弾の爆発により、たちまち煙の海と化し、一寸先も見えなく、我が軍も壕の中に閉じ込められた。

煙が晴れて死体収容をと、壕から出ると、死体は煙と共に消え行方不明で、自分の眼を疑い啞然とした。これは恐らく死体の出た時点で、敵は携帯無線で後方基地と連絡を取り煙弾を要請したのでしよう。あまりにもタイミングが良くまた敵軍の死体収容にかける執念の強さを窺い知ることができた。

日本軍の中隊単位では連絡はすべて連絡兵を使用し、時間のロスは大きく犠牲者も出た。

へ 負傷時の状況

兵力の分散を避け、中隊主力を増強し、敵の攻撃を阻止する意図で「第一小隊（中隊主力と離れ過ぎ）は陣地を撤収して中隊主力の位置に合流せよ」との命令にもとづき、昼間は敵の監視が厳しく移動は無理であるので、夜陰に乗じて敵の目を盗み危険区域の川を虎の尾を踏む思いで渡河し、一応安全地帯の右岸崖下にたどり着く（これまで中隊の連絡兵が渡河のたびに精巧な照準具で装備した敵の狙撃兵に撃たれ戦死者も出た）。

当時、私は猛烈なマラリヤ病にかかり連日四十度の高熱で苦しみ、体は衰弱し足元はふらつき、意識朦朧、まるで夢遊病者のようで、部下の肩に寄りかかり、やっと歩ける最悪の状態であった。尾根の下り坂道にさしかかった折、左足が石ころを踏み足を滑らせ重心を失い部下の肩から手も離れて、あつという間に横転し同時に体が宙に浮き、左谷川に転落した。（落差七メー

トルぐらい）体が空中で一回転し俯せの姿勢になり、そのままの状態で落下して、頭部と左膝を強打した。その瞬間までは覚えていたが、その後は失神したのでしよう、時間の経過を全然記憶していない（部下の話では三時間後ぐらいに探しあてた由）。

部下の助けで意識が戻り、人間の本能でしようか、瞬間的に打撲個所の頭部に手を当て調べたが、幸いにも鉄帽のお陰で異状は無く（鉄帽は落下の衝撃で掛かっていた顎紐は切れ飛び散り不明であった）、次に膝関節はと体を起こし見たところ被服は破れ骨が露出し、出血も酷く（傷口三方所）また凄く腫れ、膝頭の血はグラグラと動き、押さえても感覚は無く、痛みは無かったが、自力では全く動けないため、部下の助けを借り、四苦八苦した末、辛うじて中隊本部に着いた。

衛生兵の応急手当で傷口の出血だけは一応止まったが何分骨折の状態が重傷で、衛生兵では処置が困難であり、翌日の夜間、後方の野戦病院へ担送された。

ト 野戦病院へ後送

（昭和十八年十月八日～十九年一月二十日）

最初の野戦病院では戦場も近いこともあつて壕の中で、衛生兵から負傷時の状況について簡単な聞き取りを受け、軍医の診断後、包帯交換のみの手当てで即時後方の第二次野戦病院へ移送された。熱帯地のことで、傷口の化膿も早く知らぬ間に蠅が付着し、卵が蛆虫となり傷口の中で動くので気分が悪く、衛生兵に取り除いて貰ったが、体の一部に蛆虫が沸くのは初めての体験であり、これが戦場での当たり前の出来事かとつくづく思い知った。

マダンの野戦病院は主として重傷重体患者の収容病院であり、椰子林の中に九五式の天幕を張り病舎にしていた。私はこの病院で約一週間過ごしたが、隣のベット（露地に直接担架を置き代用ベットにしていた）に重体のマラリヤ患者が次々と入院し、連続七名の戦病死者を見た。患者の共通点は体が極端に衰弱しており、顔面は土色に変色し、口を利く力も無く、ただ静かに眠り続け、苦痛の様子もなく無言のまま死亡し、悲しい哀れな涙を誘う末期でした。

三 内地還送

膝関節の状態は、依然として伸びたままで、歩行は不能であり、担架に乗りウエワーク野戦病院へ転送になつた。機能回復には長期間の治療を認めるとの診断で、内地還送が決定し、ニューギニア最後の病院船に乗り離島してバラオ島および比島マニラの陸軍病院を経て、昭和十九年四月十八日広島陸軍病院に入院した。

広島病院で約二カ月間治療に専念した結果、徐々に機能も回復し、松葉杖で歩けるまでになつたので、原隊所在地の京城陸軍病院へ転送になつた。

京城病院でも治療効果が顕著に現れ、待望の原隊復帰が認められ、昭和十九年八月十日朝鮮第二十二部隊第五中隊に帰隊した。

四 終戦

中隊復帰後は内務班長を勤めると共に、週番下士官の任に当つたり、また衛兵司令を勤める等多忙にして厳しい勤務の連続であつた。戦争も最終段階に突入し、米軍の上陸に備えるため朝鮮軍にも大動員が下令され、部隊も野戦隊に編成替えとなつた。これと同時に

私は南朝鮮の光州師団歩兵補充隊に転属した。

ここで終戦を迎え、無事に博多に上陸し、昭和二十一年十一月四日故郷に帰った。

五 結び

東部ニューギニアの戦争では約十四万人が参戦し、そのうち十一万人の多数の戦死・傷・病死者を出し、生還したのは約三万人といわれている。私は幸運にもこの少数の生還者の一人であり、負傷箇所も治り、戦後平和日本の復興に一役を尽くし、長年勤めた会社も無事に定年を迎えることができた。

然し約五十年を経過したいまでも、臉に浮ぶ戦場の一駒があり、一日たりとも忘却したことはない。

遠く離れた南の島、灼熱の戦場で敵の銃弾に倒れ、飢餓や病魔と闘い、祖国日本の勝利を願う信じ、謳歌すべき青春も知らず、あるいは恋人を、また妻子や両親を故国に残し、平和日本の礎となり戦場の露と消え、戦没した幾多の英霊に対し、感謝の念を捧げ、朝夕仏壇に向い献灯し、香を焚き、ひたすらお静かにお眠り下さいと冥福を祈ることを私に残された余生の勤めと

し、元気で頑張っています。

戦争とうた

東京都 下川 武夫

“歌は世につれ、世は歌につれ”というが、どんな歌でも人の胸をうち、心に残る歌はよいものである。

あの日、あの時の映像が郷愁のなかに甦る。そして時には大きな力をもつものである。特に戦争という極限の状態のなかでうたった歌はなつかしく、ともすれば歴史の彼方に埋没しようとする思い出を呼びもどしてくれる。これはいつの時代でも生死の境を歩む人間の赤裸々な姿の叫びであり、皆共通したものがあつたらうと思う。

北支の大行山脈で見た月、ニューギニアの海岸線で椰子の葉陰でみた月。砲煙くすぶるなかで、ところ変われど、情趣豊かなものがあり、ひととき生きている味をかみしめながら、戦友と共にうたい、励まし、慰